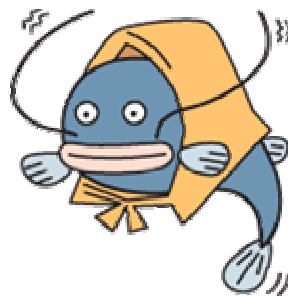
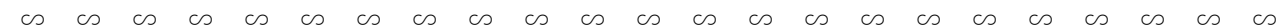


# 緊急地震速報 なまずきん

マンスリー レポート  
2008年12月号



発行元 株式会社 ハレックス



## 岩手・宮城内陸地震と岩手県沿岸北部の地震に関する 緊急地震速報の利活用状況に関するアンケート調査結果

気象庁と内閣府は、「平成20年（2008年）岩手・宮城内陸地震」及び岩手県沿岸北部の地震における緊急地震速報の利活用状況についてアンケート調査を行い、その結果を平成20年11月28日に発表しました。  
<http://www.jma.go.jp/jma/press/0811/28a/1128rikatuyou.html> 概要は以下のとおりです。

運用開始後の初めての大きな地震である6月14日の岩手・宮城内陸地震及び7月24日の岩手県沿岸北部の地震について、東北地方にある各種事業所を対象とした緊急地震速報の利活用状況のアンケート調査を行った結果、東北地方の南部の2県（山形、福島）の回答数が、他の4県（青森、岩手、宮城、秋田）に比べると若干少ないものの、まんべんなく回答を得ることができた。

アンケートの結果から、いくつかの明らかになった点がある。

### 1. 受け手にとっての猶予時間が、計算上の猶予時間ほど長くはなかった

今回の地震では、震源の近くでは初期微動でもかなり強い揺れとなり、初期微動を主要動と勘違いし、見かけ上ではあるが、猶予時間が短くなった可能性が高い。専用の受信端末であれば、受信直後から設備を制御したり報知音を鳴らしたりして、迅速な対応が可能であるが、テレビなどでは緊急地震速報が流れても、すぐに緊急地震速報と認識できない可能性があり、その分だけ猶予時間は短くなると思われる。

緊急地震速報の迅速な発表・伝達に加え、より速く緊急地震速報であることを認識できれば、受け手にとっての猶予時間が長くなり、少しでも計算上の猶予時間に近づけることができる。そのためには、テレビ等での試験放送や専用端末の訓練機能等により、緊急地震速報の報知音がどのようなものであるかを熟知しておき、チャイム音だけでも身の安全を確保する行動にすぐさま移れるよう、練習をしておくことが重要である。

### 2. 緊急地震速報による事故や混乱が、今回の地震については発生しなかった

緊急地震速報の本格運用を始めるにあたって、緊急地震速報による事故や混乱の発生が危惧されていたが、今回の地震について、多少混乱があったとの回答がいくつかあったものの、地震そのものに驚いたり、その後どのように対応してよいか迷ったりしたことによる混乱であり、緊急地震速報が引き金となった混乱は発生していない。

今回の地震が土曜日や深夜の休業時に発生したため、緊急地震速報が利活用されておらず、今回の事例だけで事故や混乱は心配ないとは言いきれないことから、混乱なく利活用されるよう、周知・広報を進める必要がある。

### 3. 認知度

内容について、理解していた事業所は79%であり、「名前だけを知っていた」は14%であった。また、警報化については、一般提供開始から2ヶ月遅れで実施したため、あまり認知されていない状況である。

これまで周知・広報では、緊急地震速報の仕組みや技術的な限界、「利用の心得」などの説明を行ってきたが、効果について疑問を持つ方には今回の地震での利活用事例を提示したり、より速く緊急地震速報であることを認識して身の安全を確保する行動に移すためには日頃の訓練が重要であることなど、今回のアンケート結果を活かした周知・広報を行う必要がある。

気象庁報道発表資料（平成20年11月28日）より

# 〜〜〜 なまずきんの働き (2008年11月) 〜〜〜

## 【発信数概要】

緊急地震速報（予報）が36個の地震に対し発信され、総数は187通でした。平成18年8月に先行運用が始まってからの月平均データと比較しますと、地震数は65%、発信数は約60%と本年2

月以来の少なさでした。

また、推定震度4以上と報じた地震数は、2個とこれも本年2月の0個以来の少なさでした。なお、平均数は約7個です。

## 震度4以上を発信または観測した地震(2008年11月)

日	時分	地域名	深さ (km)	マグニチュード	速報発信数	速報最大震度 (最終報震度)	観測最大震度 (地点数)
22	00:45	根室半島南東沖	46	M5.2	14	5-(3)	4(3)
24	06:15	岐阜県美濃東部	11	M3.9	9	3(3)	4(1)

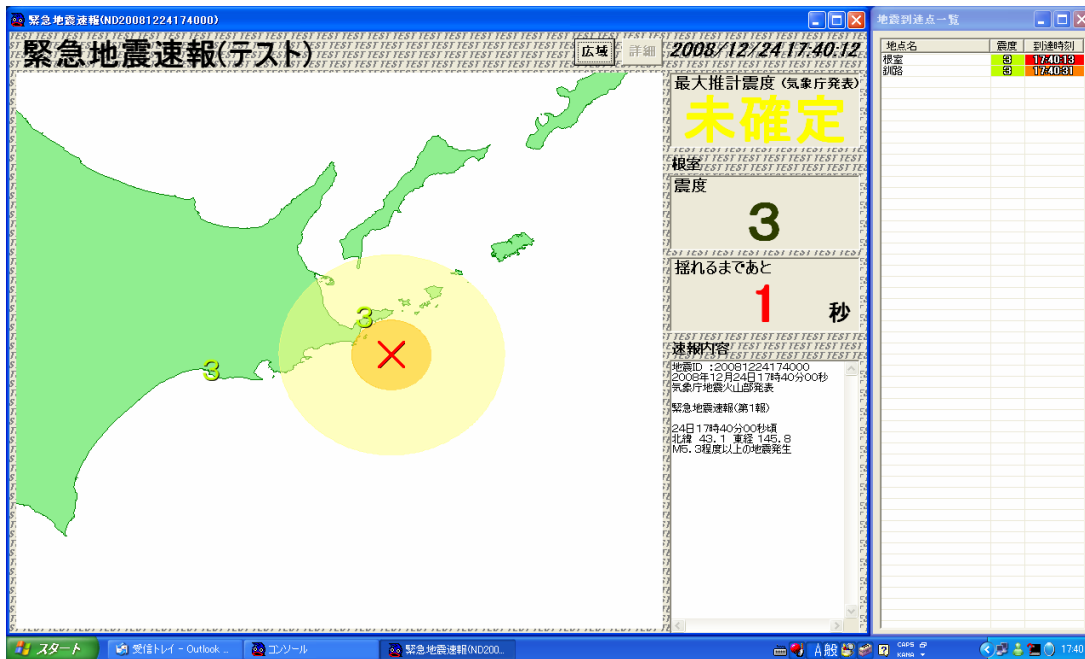
## 【根室半島南東沖の地震】

22日00時44分、根室半島の南東沖合い約20キロにマグニチュード5.2の地震が発生し、根室市と羅臼町で震度4を観測しました。

高度利用者向け緊急地震速報は14報まで出されましたが、第1報と第2報の最大予測震度は3、第3報と第4報での最大震度が4と予測された後、地震波検知から10.7秒後に発表された第5報では最大震度が5弱と予測されたため、この時点で一般向け緊急地震速報（警報）が同時に発表

されました。しかし、第6報では最大予測震度は再び4となり、第7報以降14報（最終報）までの最大予測震度は3で経緯しました。

このように最大予測震度が一時大きく見積もられた要因の一つは、第6報までは震源の深さが初期値の10kmであったためと、震源位置が一時陸域寄りに決められたことによるものと考えられます。



高度利用者向け緊急地震速報の第1報が発表された時点でのP波、S波の伝播状況を示す“なまずきん”の画面。×印が震央で、内側の濃い円がS波、外側の薄い円がP波の拡がりを見わけています。

## 緊急地震速報で最大震度が3と推定された地震(2008年11月)

日	時分	地域名	深さ (km)	マグニチュード	日	時分	地域名	深さ (km)	マグニチュード
15	04:15	十勝支庁南部	51	M4.1	22	21:13	茨城県南部	41	M3.9
20	04:26	茨城県沖	38	M4.9					